カムチャッカの秀峰アパチャ山(2741m)登頂

菅谷重夫記

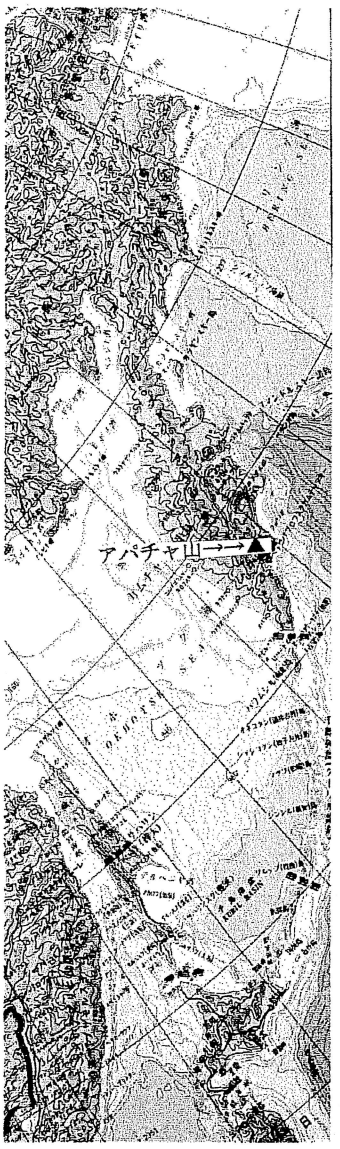
ツンドラのカムチャッカを歩いてみたい、という微かな夢が実現することになり、8月12日猛暑の新潟空港を飛び立ってから3時間余り、未知の地ペトロパブロフスクカムチャッキーに到着、まさに近くて遠い国である。空港は小雨混じりの寒風の中で、入国手続きに1時間30分もかかる入念さである。空港からバスで1時間余り、パラトウンカ温泉郷のホテルへ、ホテルといっても日本のロッジ程度のものであるが。

13日　ホテルから登山基地のあるキャンプハウスまで、軍用トラックを改造した車で3時間近く、車窓に木の枝がこすり始めたと思ったら、そこは道路ではなく川原であった。おそらく日本のワゴン車では走れない悪路、いや川の中である。

キャンプハウスに到着したころには、風雨が強く気温も下がり、これがカムチャッカだと認識を新たにする、この日の雨で山には大量の雪が降ったとのこと。

夕食を前に参加者の一人が身体の不調を訴えて下山、入院する羽目になってしまった、外国で病気になると厄介な事になる。この日のキャンプハウスは寒くシュラフにホカロンを入れて冷えを防ぐ。

14日　今日も風雨が強く登頂は無理とのことで、午後から近くのラクダ山にハイキング、私とH氏は参加せずゴロ寝を決め込む。



カムチャッカ半島（▲印　アパチャ山）

5時過ぎ、ずぶ濡れになってハイキングから帰ってくる、結果的に不参加が正解であった。

15日　登頂予備日で最後のチャンスである。　5時30分起床、朝食を済ませて

7時30分出発、今日も曇りで風が強い、しかしリーダーは決行を決断する、行けるところまで行こうと。1500m地点で水分をたっぷりと含んだガスが立ち込め視界はきかない、気温はマイナス2℃と寒い。ここで6名がガイドと共に下山。そして5時間後2000m地点の避難小屋に到着、ここで天候は回復、雪に覆われた秀峰アパチャ山が美しく輝いている。しかしリーダーは頂上付近の凍結で登頂は無理だという。ここから 700mあまりが雪の急斜面で、アイゼンを付けてアタックする、リーダーは下山の地点をどこにするか迷っていたようであるが、風も治まり快晴、ここまで来てもう引き返すことは出来ない、約2時間半で登頂、最終者も20分遅れで到着、アタックした18名全員が登頂して歓喜する。

頂上からの眺望は絶景だ、となりのコリャクスキー山(3456m)の雄姿は圧巻だ、頂上は至る所で噴煙が上がり、地面はポカポカと温かい、いつ噴火してもおかしくない火の山である。下山は1時間20分ほどで雪の斜面は終わりアイゼンを外す。

ここでリーダーの顔がゆるみ、ご機嫌になる。ここから3時間程の下山はバラバラであったが7時半過ぎには全員下山する。

約12時間の歩行、昇り降り 3800mは、私にとってモンブラン以来の長丁場であった。夕食後　キャンプファイヤーを囲み現地ガイドと共にカチュウシャを歌って楽しいひとときを過ごす。日没は10時半頃であるが、白夜と言うのか満天の星とはならない。

16日　天気は上々皆んなルンルン気分で午前中2時間程度のハイキングに出かける。午後2時キャンプハウスを出発パラトウンガ温泉に帰る予定で、キャンプサイドで雑談をしながら車の到着を待つ、3時間をすぎても車は来ない、しかし何故遅れているのか　全く情報は入らない、キャンプサイドに待つこと5時間30分、もう日本人の我慢の限界を越えてしまっている。結局原因不明のまま夜半の10時頃ホテルに到着、私は、これがロシアだとあきらめる。

17日　今日は、コゼルスキイ山麓へのハイキングである、途中マーケットに寄りウオッカを買う、山麓まで距離があるのでマーケットの中の有料トイレに入る。有料といってもトイレットペーパーもなく、日本の50年前のセッチンだ、しかしルーブル8円ではしょうがないか？　コゼルスキイ山麓の天候は快晴、約3時間のフラワーハイキングとしゃれこむ、もう花の最盛期は過ぎて秋の気配だ。ヤナギランだ

けが元気で、何処へ行っても大群落を形成している。行きも帰りも道が悪く、軍用トラックの改造車はノンクッションで、積んであったウオッカを２本割ってしまった。居眠りでもしていたら舌を噛んでしまうほどだ。移動の度に車に乗るのが苦痛になる。

アパチャ湾とアパチャ山

18日　今日は、オプショナルツアーの日で、市内見学・フイッシング・スタリチコワ島へのクルーズに別れる。私はクルーズに参加、約１時間半で島に到着。ゴムボートで島を一周、島の断崖に巣をつくり付近を乱舞する光景は壮観だ。NHKでも放映されたエトピリカやウミウの大コロニーだ。アザラシやラッコも悠々と泳いでいる、魚は50～60㎝の大物が入れ喰いだ。私も２尾釣ったがあまり簡単に釣れるので止めてしまった。ベーリング海は豊かな海である。

今日の宿は港から10分程のアバチャホテルだ。ところが車は、ホテルの前を通過して70kmもあるパラトウンガ温泉まで行ってしまった。途中おかしいと気付きストップをかけるが、話は通じない、往復140km約２時間のロスだ。あとでその原因を聞いてびっくり、今度のツアーの現地支配人の指示が間違っていたとの事。支配人は平然としている。ロシアではそんな事は小事にもならない？？？？？？

ロシアは大国だ、カムチャッカ州の面積は47万平方ｋ　日本の国土の1.25倍だ。人口は44万人と希薄である。北緯51度から65度のカムチャッカの気温は、７月が11℃～16℃　１月はマイナス6℃～－22℃とのこと、半島の３分の２は道路も鉄道もないツンドラの大地である。

19日　正午過ぎ　ペトロパブロフスクカムチャッキー発　チャーター便にて帰国の途に。感動と、驚き、大自然の雄大さと戸惑い、数々の思いでを胸に、日本時間の正午　新潟空港に到着、相変わらずの猛暑だ。

今回で６度目の海外登山になるが（５大陸＋１）いずれも登頂に成功しました。

大　姑　娘　山 (5,025m) 登　頂

ター　クー　ニャン　シャン

中国の山は登って見たいと思っていた。夢の一つであった。体力の衰えを感じながら１年余り、トレーニングに励んで来ましたが、5,000m以上の山とあって、ぎりぎりまで悩んだ末の決断であった。

7月17日

猛暑の名古屋空港を立って４時間→→重慶空港に到着。重慶の気温は３８度、それもそのはず北緯２９度の奄美大島と同じ位置だ。

四姑娘山（提供　菅谷さん）

空港から四川省の省都、成都までマイクロバスで３５０ｋの移動である。成都のホテルまでコンクリート舗装のクッションの良くない道路を走ること５時間３０分、日本国内の電車バスを含めてもう１３時間も車に揺られいる。腰痛の私には苦痛であった。

１８日　早朝ホテル前で通勤風景を見ていて圧倒されてしまった。職場に向う自転車の群れは５－６列になって突っ走って行く。その数何百何千？道路は車道　自転車道　歩道と区分整備されているが、車道を自転車も人もリヤカーも走っている。まだ自動車が主役ではない。

四川省の成都　延安は中国革命長征史の舞台になった所で有ります。

四川省の面積は４８万平方ｋ、日本の国土の1.26倍、人口は8,700万人とのことである。成都は今なお建設ラッシュで刻々変貌を遂げている。今日はパンダ保護区のある臥龍までの移動であるが、途中秦の時代に作られたという、灌漑用ダムのある都江堰市に寄り、古宮やダムを見学する。カタ言の日本語で中国人ガイドが説明するが、中国の歴史に無知な私には退屈であった。そ

こから臥龍まで山坂道をバスで揺られること5時間→→パンダ保護研究センターでパンダを見学、パンダは確実に減っており自然のまま放置すれば絶滅の危機にあるという。

19日　臥龍のホテル8時に出発、巴郎山峠（4,320m）を越えて登山基地のある日隆までバスで4時間の移動である。巴郎山峠付近は幻の花ブルーポピーや芥子の花が咲き乱れる花の宝庫であった。しかし絶えず霧が立ち込め気温も低く、頭痛もあり長く花を見ている訳にはいかなかった。
巴郎山峠を越えると、風景は一変しチベットの領域である。正午過ぎ日隆のホテルに到着。こんな山奥に立派なホテルが立ち並び、今なお建設ラッシュである。

20日　今日は高度順応日で日隆の村はずれのチベット仏教の寺院跡まで、お花畑を探勝しながら3,400m地点まで、6時間かけてトレッキング四姑娘山の雄姿を堪能する。異変　もう4日間も脂っこい中国料理ばかりで食欲がない。私は日本から持っていったレトルトのお粥を食べる。

21日　9時ベースキャンプに向けて出発、今日はあいにくのの雨の中を標高差500mの登りである。高山植物、花の咲き乱れる中を約5時間の登りで高度 3,600mのベースキャンプに到着。雨足が強くなる中、今日からテント生活である。5,000m級の山々が林立するキャンプサイドは清流とお花畑と、上高地を思わせる光景であるが、上高地より 2,000m以上も高いので動き回る訳には行かない。

22日　夜来の雨は上がったが、雲が多くガスが立ち込めている。高所順応為、お花畑の中を 4,200m付近までトレッキング、四姑娘山が間近に見えるの筈であるが、ガスが立ち込めていて姿を見せなかった。
大海子と呼ばれる湖は静寂そのものである。5時間半の高所トレッキングの後、ベースキャンプに戻り、時の流れに身を任せ、至福の時をおくる。
夕食後、8時ごろ床に付くと同時に雨が降りだし雨音で寝付けなかった。

23日　午前4時トイレに起きてびっくり、夜来の雨は上がり満天の星空が広がっていた。今日は雲一つない晴天だ。朝食を済ませ第一キャンプに向け出発。C1までの山全体が放牧地になっていて4,000m近くまで、ヤクや黒ブタも放し飼いになっている。夕立と霧、放牧の糞が花の養分となり、見渡す限りのお花畑である。

そして早いグループは正午過ぎＣ１に到着。私は第２グループで13時頃4,300ｍのＣ１に着いたが、頭痛に悩まされる。全員が到着して間もなく、雷鳴が轟き夕立の襲来だ。皆テントに入り明日の登頂に向け準備に余念がない。

２４日　４時起床。天気は上々朝食を済ませて６時出発、急峻なガレ場、雪の斜面を登ること２時間、大姑娘山（5,025m）の頂きに立つ。我々を熱烈歓迎しているかなようにの快晴無風、四姑娘山（6,250m）が圧倒的迫力で迫ってくる。左に雪の張り付いた鋭鋒、神山（5,413m）が聳え立っている。何という威厳か、神の山とはよく名付けたものだ。また、遥か遠くに雪を纏ったミニヤコンカ山が印象的であった。ツアーリーダーも４度来てこれだけの展望は初めてだと言う。頂上には４０分程居たが、遅いグループはまだはるか後方でもがいている。私たちは下山を開始、Ｃ１を撤収してベースキャンプへ、約７時間の登降であった。今回は高所順応がうまくいって頭痛はあるものの特に苦しむ事もなく、登頂に成功しました。

夕食は１３名全員の登頂を祝してビールで乾杯。そして食堂テントで現地ガイドや馬方と打ち上げパーティ、チベットの歌や踊りで盛り上がる。そこへ日隆の村長が飛び入り参加。中国語で北国の春を歌って歓迎してくれた。

感激　感激……

２５日　ベースキャンプを撤収し、花の咲き乱れる山道を約４時間で下山。自分が死んだらこんな花園に埋葬してもらいたいなあーと言ったら、まだ５０年早い、とＳ氏の声あり‥‥。正午過ぎ日隆のホテルに到着、昼食後バスで臥龍へ、３時間のパーローシャン峠越えである。１６時臥龍のホテルに到着。５日ぶりにシャワーを浴びる、いい気分だ、ビールがうまい。

９時過ぎ現地ガイドの案内でカラオケ喫茶に行く、３人で２０曲近く歌って、お茶を飲んで、１２０元（1,800 円）だ。こんな山奥の村で日本のカラオケが歌えるなんてーーー

２６日　ウオロンのホテルを８時過ぎに出発。今日は重慶まで500ｋの移動である。こんな広い国では飛行機か鉄道の法が楽だ。途中成都で昼食、人民の逞しさと多様さを目のあたりににする。天秤棒をかついで物を運ぶ人、自転車の群れ、ヨーロッパの高級車に乗ったリッチな人。成都から→重慶へ高速道路を約５時間、昼食で充分中国茶を飲んだ私たちのＳ袋は？満タンだ。高速道路のサービスエリアは100ｋ～150kに１ヶ所ぐらいしかない。（日本

では20ｋ～30ｋに１ヶ所）苦しかったなー。
6時ごろ重慶に到着（気温39度）高台にある展望台から重慶の町を俯瞰する。長江の水量は少なく濁っている。重慶市の人口は400万人ということだが、超高層のアパートが林立する大都会だ。7時過ぎ中国最後の夜を、高級レストランで中国式シャブシャブと洒落こむ。次々と出される食材も食べ方も知らない我々は、店員に聞きながら食べたが、タレの辛いこと。39度の暑さと8時間以上のバス移動で疲れきっている私にはシャブシャブを味わう余裕はなかった。

２７日　5時半起床、6時朝食、6時半ホテルを出て空港へ。8時30分フライト、と慌ただしく重慶を後にする→→→→13時名古屋空港に到着。気温35度。この間日本では全く雨が降っていないとの事。　18時帰宅

総　括　広大な中国の一部ではあるが、この目で見ることが出来た。
日本のマスコミの報道だけでは中国の現実を見誤ってしまうだろう。
また一つ見聞を広げる事が出来ました。
大姑娘山一帯は花の宝庫で、7回の海外登山でこれだけの花園は見たことがない。これから海外登山に出かける方は候補の一つに入れておいた方が良いと思う。
６６のご老体、5,000ｍの山に登る。ついに参加メンバーの最高齢者になってしまいました。しかしモニュメントや人工的な建造物には興味がなくなってしまった私には、自然しかないのです。
山は厳しいが、他では得られない感動があるから……

（提供　菅谷さん）

謝　謝

２００１年　7月　　菅谷　重夫

個人山行

ニュージーランド トレッキング

New Zealand trekking

1月30日から2月8日までニュージーランドの山を歩いてきました。

成田から⇨⇨オークランド⇨クライストチャーチ⇨クインズタウンと、12時間のフライト、機中泊では眠られず少々疲労ぎみであった。翌日からトレッキングの開始である、クインズタウンからバスで4時間、約300kmの道のりでルートバーントラックの登山口へ。

良く整備された登山道、快適な山小屋、人の手が入らない自然のままの苔むした樹林帯、無数のエメラルドグリーンの湖、そして、滝や渓谷・清流、中高年トレッカーにとって格好のトレッキングコースであります。

2泊3日のトレッキングの後、クインズタウンに戻り、ベンローモンド山（1746m）に登山。登高差1000mぐらいの手頃な山ではあるが、展望は最高である。

翌日、中型機でマウントクックへ、飛行場から眺めるタスマン氷河とマウントクックは圧巻である。翌日フッカー谷へトレッキング、しかし強風と雨に叩かれ途中から引き返す羽目になりました。

2日目は天候が回復し、フッカー谷へ再挑戦、ニュージーランドの最高峰Mtクック(3754m) はフッカー氷河、タスマン氷河に聳えるサザンアルプスの主峰であります。フッカー谷は、氷河の末端　青い氷壁が崩壊し氷河湖に流れ込み、濁流となってフッカー川に流れ下るさまは不気味であります。

この度のニュージーランドトレッキングは、本格的な登山ではないが、憧れの国でもあり、いい思い出を脳裏にきざむことが出来ました。

余談ではあるが、観光シーズンという事もあって、自分も含めて、日本人が多すぎると思う。

しかし、トレッカーは数パーセントと見受ける。山中は静かであった。

菅谷重夫記